

発達に特性のある子どもと 家族が進化するプロセス



奥野雅子（岩手大学）

1

発達に特性のある子



その子どもが成長してゆくとき、
「自分がほかの人と同じではない」ということに気づくとき、
子ども自身がどのような気持ちで受け止めるのでしょうか？



子どもたちのころについて書かれた文献は少ない。

2

発達についての誤解

- ×障がいが重度だとさまざまなことがわからないから苦悩のない人生だ。
- ×障がいが軽度なら、重度の人に比べてそんなに困らない。
- ×知的障害は知能テストの結果だけで判断する。



3

ふたつの視点

- ・ 赤ちゃんの頃
いかにこの子の発達を伸ばすか
⇒ 「発達的な視点」
- ・ 学校に上がると・・・
友達や先生との関係性の問題
⇒ 「関係性という視点」



4

発達が気になる子のこころ

- 基本的には定型発達の子どもと同じ

できない部分を人や道具に手助けしてもらい、
できることは自分でしながら主体的に生きることが、子ども達の願う生き方

⇒ 自分に課せられた制約を引き受け、たくましく豊かに生きていくこと



誤解

- 話し言葉でのコミュニケーションはコミュニケーションのすべてではない。



ことばの障がいがあるとき、感受性はむしろ健常者より鋭敏。

独特の感受性がある。



育ちの特徴



- ① ゆっくりしたペースで成長
(加齢とともに定型児と相対的に開くという見えの現象)
- ② 親に依存する期間が長くなる。
⇒ 親子関係が濃密であるため、親の不調がすぐ子どもに影響する
- ③ ことばを扱うことに関して、理解と表出に差がでる。
⇒ ×話し言葉が少ないから、理解していない
- ④ こころの不調は、ことばでの表出が難しい分、神経症的、心身症的な症状となる。
- ⑤ 困ったことに対する対処行動がパターン化する。
EX.) こだわり行動など

5

6

<乳幼児期> 自分にひけめを感じるとき



「ひけめの萌芽」

- 人と比べるのではなく、できない自分に自分がかっかり。
- 自分と対象(人やおもちゃなど)との二者関係のなかで自然に湧き起こる(定型の子どもも同じ)
⇒ ひるむ気持ちとやりたい気持ちのはざまで葛藤
⇒ 自分ができないのではないかと脅えている子どもの心(高度な防衛機制)を親は気づかない。
⇒ ただのひけめから劣等感へ

7

8

子どもが持ち始める劣等感

親に期待され、勝手にがっかりされる

⇒その反応としておもちゃを投げつけるなど

⇒対応策：手本を示し、その場から去る

＊「疲れ」という大敵

身体的、精神的エネルギーの消耗

＊「空想の世界」という友達

現実が過酷であるとき、空想の世界を作り出し、ひとりでおしゃべりをする。



9

<児童期> 他者との関係性のなかで物語を紡ぐ

＊就学への迷いと親の願い

- 普通学級、特別支援学級、養護学校、という三つの選択肢
- 教育委員会が行う就学相談において、学校側は勉強中心に考える。
- 一方、親にとって勉強面は成長の中のひとつとして捉える



10

子どもが経験する葛藤と対処の問題

＊「自分にはできないことがたくさんある」という感覚は、どの選択肢をとっても対峙することになる。

<子どもの症状>

不登校、家で暴れる、神経症的症状などが出る。

⇒これに対し、子ども自身が説明できない。

⇒大人たちが自分勝手にその行動の意味を決めつける。

⇒子どもの内面に耳を傾けない。

⇒子どもはさらに語ろうとしない。



11

EX.)小3のAさん

子どもが授業中にたびたび脱走するので、担任は困り果て、親に日中教室に入ってつきそって欲しくないかと依頼

→ 親はしぶしぶ学校に行く

→ Aさんに廊下で会う

→ Aさんは「何しに来たのよ!」と怒鳴る

→ Aさんの不登校がはじまる



12

わかってもらえるからこそ頑張る！

相手が自分をわかろうとしてくれる場合と、全然わかろうとしてくれない場合で、子どもが自分を見せるものが全く異なる。

⇒発達が気になる子どもは訴えかける力が弱いので、受け手がそのメッセージを読み取ろうとする姿勢を強くもっていないと取り落とす。

⇒取り落とすと、彼らはそのまま胸に秘める。



13

子どもと関わる人たちの態度



“障がいがあるといことは、人としての尊厳とは何も関係ないということ、劣等感を持つ必要がないということ、障がいがあってもさまざまな能力をもち、豊かで個性あふれる子どもがあなたなのだ”

☞「障がい受容」という用語は、援助者たち、外からの捉え方であり、本人たちの気持ちを考えたときに適切な表現ではない。彼らには選択の余地がないのだから。



14

子どもが障がいを受け止めないとき

親はとても切ない気持ちになるため、かえって押し付ける。

⇒そうされればされるほど、子どもは反発を強めて逆効果

⇒彼らの反発は、障がいそのものよりも、障がいを押し付けようとする周囲の圧力であったりする。



15

思春期の到来



16

身体面と心理面のずれ

生理、夢精、性的な衝動は定型発達の子どもたちと同じだが、心理的な面に関する思春期はもっとゆっくり訪れる。

⇒ 両親がそれらに対する対処法を役割分担で教える。



17

恋、結婚

- ・障がいのある子どもたちもたくさんの恋をする。
- ・知的な障がいのない人（あるいは、ごく軽度）と定型発達の人との結婚・出産、知的障がいのある人同士の結婚は少ないという現状

⇒ きょうだいの結婚式に出席したことを機に精神的不調になることがしばしばある。



18

仕事



- ・仕事に関しては、ステップアップのような体制がほとんどない現状

- ・親の希望が、作業所のような軽作業より、やや高度な一般企業の障がい者枠での就職

⇒ 負担から体調を崩す。



19

ストレス対処の問題



精神的に負担がかかるとき、私たちは身体的にも疲れるので休んだり、気晴らしをしてストレスを発散させて回復する。また、問題を内省することによって解決することもある。

⇒ 障がいがあると、このようにこまめに回復させることが難しい。

⇒ 身体の不調や精神症状に発展

⇒ 医療機関や相談機関を受診することの大切さ

20

思春期に入った子どもへの対処

親による保護の形の変更

“過剰な保護からふつうの保護へ”

But, 健常な子どもの場合よりも保護の手を強くする必要

- ・学校の先生に配慮してほしいことを伝える。
- ・いじめがあったとき、抗議する。

⇒親の保護下で、子どもは自分を守る力を育てる。

(子どもは親に秘密を持ったり、自分で試してみたりする)

⇒親は徐々に手を引いて、子どもに任せる。



21

反抗期

障がいを持つ子どもたちは、指示に従って言われたことをきちんとやるのが大事であり、彼らの生きるための技術であると言われる。

⇒あまりにも彼らの人間性を無視した、健常の人々の勝手な論理

⇒拒否能力や自己主張の発達も大事



22

自分を取り巻く世界の変化

今まで仲良くしていたきょうだいやいとかなど、周囲の成長によって、彼らをとりまく世界がよくわからない見知らぬものへ変化してゆくことへの戸惑いと淋しさ、受け止められなさ

⇒周囲への祝福の気持ちと切ない気持ち、多彩な感情の経験……不調へ

⇒それらを決して受け止めたくないのではなく、受け止めるのに時間を要するということ。



23

大人になって —自分らしく生きてゆきたい—

*自立の問題

高校、養護学校を卒業後、

すぐに就労させたがる社会 …… 大人扱い

⇒ 大人になってゆく時間を自由に使えないという制約

Cf. 定型発達の人には大学、専門学校に行ったり、留学したりするチャンス

就労した後、

職員の指示に黙って従えない時 …… 子ども扱い

・親と一緒に暮らすかどうかの選択



24

将来の夢について

＊サバンのような才能！

⇒才能を開花させる環境を準備する

＊仕事でチーフになる夢、結婚する夢をもつ

⇒ 受け入れがたい事実を突きつけられることもあるが、受け入れるときには「時間」が必要。



25

子どもの苦悩・親の苦悩

- ・子どもの苦悩は、誰にもわかってもらえない独自の体験である。
- ・親による子どもの受容は、行きつ戻りつしながら、螺旋を描くように歩む。
- ・受け入れないと生きてゆくことが苦しいから受容をせまられるが、一生完成するものではない。完成する必要もない。



26

発達が気になる子供の援助者として

＊ことばを扱う力の向上

ことばに対する関心が少ないことも多いが、ことばを自由に扱える楽しさを知ってもらう。

⇒私たちはものを考えるときにことばを使う。

⇒葛藤を抱えるということは、

考えるために必要な「ことば」に対する感受性を鋭敏にする



27

子どもたちの表現

子どもたちのペースで思いっきり話をするを大事にする。

⇒あまり急いで細かい部分を正確に把握しようとせず、確認は最小限にする。

⇒音楽や絵などを用いて、非言語的な関わりを取り入れる。



28

家族のライフサイクルと葛藤

- もとの家族（源家族）から結婚へ
- 一人目の子どもが産まれる
- 二人目の子どもが産まれる
- 子どもが学童期から思春期へ
- 子どもの巣立ち
- 夫婦ふたりへ



29

家族の進化

- 家族のメンバー間の境界を変化させる
- 世代間の関わり方を少なくする
- 家族内暗黙ルールの変化させる



30